

追放された最強令嬢は、  
新たな人生を自由<sub>に</sub>生きる

4

Tohno  
灯乃

ill. 深破 鳴



## ヒューバート

魔導武器の開発に携わる、天才研究者。ジョッシュの兄。



## ジョッシュ

明るく素直な性格のアレクシアのクラスメイト。ツッコミ気質。



## キャスリーン

アレクシアのクラスメイト。商会の娘で、姉御肌。



## ケヴィン

ランヒルド王国飛行魔導兵士部隊の隊長。王国屈指の実力を持つ戦術家。



## アナベル

飛行魔導兵士部隊の副隊長。ケヴィンの右腕。



## ウィルフレッド

アレクシアのたったひとりの従者。クールかつ優秀だが、主のやらかしに翻弄されがち。



## アレクシア

辺境伯家を追放された本作の主人公。賢くて腕が立つ最強のお嬢さまだけれど、平民としてはまだまだ勉強中。

## 登場人物紹介



デズモンド



セフィード



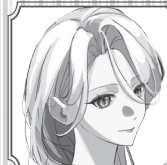
ベネディクト



ローレンス



エリック



ブリュンヒルデ

## 第一章 飛行魔導兵士育成コース

夏季休暇が終わりを告げたからといって、急に秋めいた過ごしやすい気候になるわけではない。

まだまだ気温は高いし、屋外で長時間過ごすには危険な時期だ。

始業式を明日に控えた午後。

従者のウィルフレッド・オブライエンとともに、ランヒルド王国王立シンフィールド学園の生寮に戻ったアレクシア・スウィングラーは、荷物を整理しながらふと窓の外を見た。

（今日から、セフィードも聖ゴルトベルガー学園の寮に入るわけか……。まあ、あいつも黙っていたら、ただの可愛らしい子どもだ。ウィルフレッドが作ったマニュアルもきちんと暗記していたし、そうそう追い出されることはない……といな）

現在、アレクシアは平民階級の子どもたちとともに、王都の学園で学んでいる。彼女の生家は、東の国境守護を任とするスウィングラー辺境伯家だ。

最高の淑女教育と兵士教育を施された彼女は、辺境伯家の後継者となるはずだった。

しかし、数ヶ月前の冬のこと。

両親の離縁を契機に、アレクシアはウィルフレッドとともに生家を追放された。

その後、紆余曲折があったものの、現在では辺境伯家の当主である祖父のデズモンドと和解。

また国王と直々の契約を交わしたことにより、有事の際には国境守護の任に就くことになっている。

そんなアレクシアが、戦場で保護した少年兵がセフィードだ。

彼女の庇護下で過ごすうちに、彼は少しずつ『礼儀正しく可愛い普通の子ども』としての振る舞い方を学びつつある。

基本的に無表情なのは変わらないけれど、もともと非常に賢い子どもだ。

ウィルフレッドが作った『貴族のお坊ちゃまとその従者への対応マニュアル』は実に立派な出来だったし、たとえ貴族の子息が集う学園での生活がはじめてでも、さほど心配する必要はないと思いたい。

(……うむ。これほど無意味にうじうじと思い悩むのは、人生ではじめてかもしれない)

自分でもなんだか情けなくなってしまうけれど、アレクシアにとってセフィードは、可愛い養い子のようなものなのだ。

対人スキルがまだ低すぎる彼のが、気になってしまっているのは当然と言えよう。

とはいえ、聖ゴルトベルガー学園は、王太子のローレンスが在学中であることもあり、王宮の最深部と同等のセキュリティが保障されている。

戦時下である現在、敵国にとって非常に貴重な人材であるセフィードを確実に守るためには、あちらの学園で過ごすのが最善なのだ。

多少のトラブルがあったとしても、そのあたりのフォローについては王太子にも話を通してある。

セフィードの護衛対象であるアレクシアの腹違いの弟——ベネディクトは、ローレンスと順調に友誼を深めているようだし、万が一のときにはきつと便宜を図ってくれるだろう。

そんなことを考えながら迎えた、翌朝。

久し振りに教室に集ったクラスメイトたちは、みないい色に日焼けをしていた。

漏れ聞こえてくる会話から察するに、山や海で楽しい思い出を作ることができたようだ。なるほど、とアレクシアはほほえましい気持ちになった。

(平民の子どもというのは、夏の休暇には屋外で遊ぶものなのだ。健康的で、何よりだ)

そこでふと、去年までは夏の社交シーズンで客人対応に忙殺されていたことや、今年の夏季休暇の濃すぎる経験を思い出し、アレクシアは遠いところを眺めたくなる。

ものすごく今さらではあるけれど、休暇というのは本来、心身を休めるために存在しているのではないのだろうか。

「アレクシアさま。どうかささいましたか？」

そんな彼女の様子に気づいたのか、心配顔のウィルフレッドが声をかけてきた。

従者としていつもアレクシアのそばにいてくれる彼は、東の大国ブラジエナ王国出身の十七歳の少年である。

ウィルフレッドは、彼の国の筆頭公爵家の次男坊だ。七年前、王家によって生家が反逆の汚名を着せられた際に、彼はたったひとりでのランヒルド王国に逃がされてきた。

王国軍との激戦の末、消息不明となったオプライエン公爵家の人々は、いまだ誰ひとりとして生死が確認されていない。

今のアレクシアにとつて、ウィルフレッドから家族と祖国を奪ったブラジエナ国王をどつき倒し、誠心誠意詫びさせることが人生の目的なのである。

いや、と軽く首を横に振って、アレクシアはウィルフレッドを見上げた。

「なんでもない。ただ、クラスのみなが揃っていい色に日焼けをしているものだから、少々驚いただけだ」

なるほど、とウィルフレッドが小さく笑う。

「きつと、夏季休暇を満喫していたのでしようね。うらやましい限りです」

そんな彼の言葉に反応したのは、近くの席にいた三人の少年たちだ。

よほど気が合うのか、入学以来この三人はいつも一緒にいる。

揃って個性的な彼らは、クラスメートたちだけでなく、教師たちからも親しみを込めて『三バカ』などと呼ばれていた。

成績はそれぞれの得意分野でトップクラスだというのに、そんな呼称を本人たちも笑って受け入れているのが面白い。

その中の、少し癖のある栗色の髪に鮮やかな緑色の瞳をした生徒が、不思議そうな顔で問うてきた。

「えー？ 何？ あんたら、夏季休暇なのに全然遊んだりとかしなかったわけ？」

ブランドン・マクニールという名の彼は、とても好奇心旺盛な少年だ。

はじめて触れる模擬魔導武器でも、授業のたびにとてもわくわくした様子で取り組んでいる。

コミュニケーション能力も非常に高く、教師たちに物怖じせずに質問しているところを何度も見た。

アレクシアは、あっさりと頷く。

「ああ。少々、忙しかったというのもあるが……。正直なところ、わたしには一般的な遊びというものがないんだ」

実際、ウィルフレッドの誕生日祝いで遊園施設へ遊びに行った際も、どう楽しむのかわかりず、結局「自分たちには時期尚早な場所だった」と反省する羽目になったのだ。

ぼかんと目を丸くしたブランドンの隣で、濃褐色の髪を短く整えた少年が、その黒い瞳に困惑を滲ませた。

「一般的な遊びって……。夏季休暇だったら、普通に観光地とか、山や海に行くとかだろ？ そういうの、したことねえの？」

ウィルフレッドと変わらないほど上背のある彼は、ディーン・ギルモア。近接戦闘訓練では、常にトップクラスの成績だ。

魔力保有量そのものはクラスの平均値程度だが、魔導武器を扱うセンスが抜群だ。

彼の言葉に、アレクシアは首を傾げた。

「観光地というのが、人々が遊びに行く場として相応しいのはわかるんだが……。山というのは、

過酷な状況下での生存訓練を行う場ではないのか？ 海といえは——港か？ 港は、他国との交易の場だろう。社会勉強にはなるだろうが、遊び場とは違うのではないか？」

彼女の素朴な疑問に、少年たちがなぜか揃って頭を抱えてしまう。

最初に顔を上げたのは三人のうちの最後のひとり、癖のない金髪に水色の瞳の、セドリック・ランバートという少年だ。

彼は、聖ゴルトベルガー学園とフレイス女学院との合同新入生歓迎会において『お嬢さま言葉が要する時間の計測と統計』の結果をグラフにするという遊びに、率先して取り組んでいた。

黙っていたら冷たく見えるクールな容貌に似合わず、なかなか愉快な感性の持ち主である。

「……ウン。あんたらが、一般的な遊びとは無縁な生活をしてたつてことは、よくわかった。お貴族さまつて、ホント大変なんだなあ」

「いや、王都住まいの貴族たちは、それなりに華やかな遊びをしていると思うぞ。ただ、わたしの故郷が、田舎すぎたというだけのことだろう」

アレクシアが話を雑にまとめたとき、担任教師のエリック・タウンゼントがやってきた。

「おう、ガキども。久し振りだな。席に着けー」

相変わらず、教師とも思えぬ乱暴な物言いだ。

慌ただしく席に着いた生徒たちをひととおり見回した彼は、一瞬アレクシアに目を留めた。

(なんだ……?)

ほかの生徒たちに気取られることはない程度の、わずかな迷いを感じる視線。

不思議に思った彼女が内心首を傾げていると、エリックは教壇に両手を置いて口を開いた。

「七カ国連合からの宣戦布告を受け、王室からこの学園に戦時下特例が発令された。——今学期より、飛行魔導兵士を育成するための特別コースが開設される。一定レベルの魔力を持つ生徒は、学年を問わず志願することが可能だ」

その言葉に生徒たちがざわつく中、アレクシアはくつと眉根を寄せる。

(……やはり、そうきたか)  
この夏、七カ国連合からスウィングラー辺境伯領に送り込まれてきた、十二名の飛行魔導兵士たち。

彼らの存在が、大陸の空を戦場に変えた。

このランヒルド王国でも、すでに優秀な近衛兵士たちで構成された飛行魔導兵士部隊が編成されているという。

だが、そのメンバーはたったの十八名。

今後の状況を考えて場合、シンフィールド学園に飛行魔導兵士を育成する機関が設置されることは、アレクシアも当然の流れとして予想していた。

だが——。

(ここにいる生徒は、みな王宮警護任務を志望して入学してきた子どもたちじゃないか)

よほどのことがない限り安全が保障されている王宮警護と、常に死と隣り合わせの飛行魔導兵士部隊では、危険度は比較にならない。

まさか、その事実を正しく教えないまま、生徒たちに選択を強いるわけではなからうな、と思いつながらエリックを見つめていると、彼は小さく息を吐いた。

「ただ——これは、この学園の教員としては不適切な発言だとわかったうえで、正直に言う。たしかに、平民出身のおまえたちが、今は近衛出身のエリートしかいない飛行魔導兵士部隊の一員になれば、破格の出世といえるだろう。だが、『飛行魔術で空を飛ぶ』つてのは、それだけで命がけの挑戦なんだ」

一度言葉を切ったエリックが、ぐるりと教室全体を見回す。

「このクラスにいるおまえたちは、全員飛行魔導兵士部隊育成コースを志望できる。ただし、アレクシア・ガーディナーとウィルフレッド・ガーディナーのふたりは、対象外だ」

は？ と真つ先に訝しげな声を上げたのは、ブランドンだ。

軽く片手を挙げた彼が、エリックに問う。

「なんで、そのふたりは対象外なんだよ？」

「そりゃあ、そいつらはすでに飛行魔術を習得しているからな」

あつさりした答えに、驚いた生徒たちの視線が自分たちに集中するのを感じ、アレクシアは顔をしかめた。

「エリック。そのことを、わざわざクラスメイトたちの前で口にする必要はあったか？」

「なかつたかもしれないが、正直なところおまえたちには、こいつらのお悩み相談に乗ってもらえるとありがたいと思っっている」

あくまでも真顔で返され、アレクシアは脱力した。

「……相変わらず、生徒思いなことだな。だが、教師としてはそれでいいのか？」

「うむ。俺は、自分の可愛い生徒のために利用できるものは、なんでも利用する派なんだ」

自分たちも彼の可愛い生徒のはずなのだが、そこはツツコんだほうがいいのだろうか。

アレクシアが迷っているうちに、腕組みをしたエリックがため息をつく。

「何しろ俺は、飛行魔術を習得していないんでな。こうやって、最低限の心構えを伝えるのがせいぜいなんだ」

なるほど。そういうことであれば、仕方があるまい。

「了解した。では、クラスの担任教師として、その心構えとやらをきっちり語ってやれ」

おう、と頷いたエリックが、改めて生徒たちを見回す。

「話を戻すぞ。——飛行魔導兵士の増強は、今後の国際情勢を考えたとき、絶対に避けては通れない命題だ。ただ、飛行魔導兵士つてのは、最前線への投入を前提として育成される。つまり、おまえたちがその道を選んだ場合、命の保証がまるでない人生を送ることになるわけだ」

教室が、しんと静まり返る。

「おまえたちは、たしかに飛行魔導兵士育成コースを選べる。それは、持って生まれた魔力保有量が高かったからこそ、得られた権利だ。だが、決して義務じゃねえ。ちよつとばかり、人より強い力を持って生まれたからって、命がけで戦う人生を選ぶ必要なんて、絶対ないんだ」

エリックのよく通る低い声が、教室の空気を震わせていく。

「だから、本当によく考える。飛行魔導兵士になることで得られる名誉と報酬。それは、自分の命をかけてでも、その事実を家族に背負わせてでも、手に入れたいのなのか。考えて考えて、その結果本当におまえらがそれを望むなら、絶対に泣き言は口にしないと自分に誓え。飛行魔導兵士育成コースは、生半可な覚悟で挑戦できるものじゃないからな」

入学当初、エリックは今と同じ教壇の向こうで「無理だと思ったら、そう言っていんだ」と、このクラスの生徒たちに最初から逃げ道を用意してくれていた。

その彼が、今回の件に関しては泣き言すら許さないという。

常に最前線で戦う人生を選ぶというのは、そういうことだ、と。

「この国の飛行魔導兵士部隊が、新しく開発された飛行補助魔導武器を採用していることは知っているな。万が一それが破壊されたときは、当然ながら自力で空を飛べなければ死ぬだけだ。よって、飛行魔導兵士育成コースでは、まず飛行魔術の訓練からはじめることになる。ちなみに、現時点で想定されている志願者の脱落率は、九十パーセント以上だ」

たとえその道を志しても、実際に飛行魔導兵士になれるのは十人にひとり。

それだけ厳しい訓練を課されると告げられ、クラスメートたちの間に動揺が広がる。

「飛行魔導兵士育成コースの願書締め切りは、十日後だ。それまでに覚悟を決めた者は、個別に俺のところへ来い」

それから、とエリックがアレクシアとウィルフレッドを順に見る。

「おまえたちには、飛行魔術の運用を前提としたカリキュラムを、改めて組み直すことになってい

る。その訓練の開始も、十日後からだ」

アレクシアは頷いた。

「了解した。ところで、エリック。ひとつ確認しておきたいんだが、飛行魔導兵士育成コースへの志願条件というのは、規定を満たした魔力保有量だけなのか？」

「ああ。そう聞いているが……？」

それがどうした、と言いたげな彼の様子に、小さく息を吐く。

「まあ、最低限の基準として魔力保有量を提示するのは、わからないでもないがな。——これは、あくまでもわたし個人の判断に基づく意見だから、そのつもりで聞いてくれ。わたしの見た限り、このクラスで飛行魔導兵士育成コースを志願しているのは、六名だけだ」

は、と声を零したエリックに、アレクシアは続ける。

「春からの数ヶ月、わたしはクラスメートが訓練に取り組む姿を見てきた。飛行魔導兵士に必要とされるのは、十分な魔力保有量だけではない。基本的な身体能力、格闘技術。魔導武器を扱うセンス。咄嗟の事態にも即応できる判断力と瞬発力、思考の柔軟性。これは、個人の優劣の問題ではない。単純に、向き不向き——適性の問題というやつだな」

どこまでも淡々と、彼女は告げる。

「もちろん、その六名以外の生徒たちが絶対に飛行魔導兵士にはなれない、というものではない。与えられた課題をクリアし、資格を得るだけならば、十分に可能だろう。ただ、わたしがその生徒たちの家族であれば、必ず止める。未来ある優秀な子どもに、無為に死んでほしくはないからな」

束の間、沈黙が落ちた。

ひどく真剣な眼差しをしたエリックが、少し掠れた声で口を開く。

「おまえは……その六人の名前を、言うつもりはあるか？」

「本人が、希望するならば」

そう応じた彼女にエリックが何か言うより先に、椅子を蹴って立ち上がった者がいる。

今朝、クラスで最初に言葉を交わしたブランドンだ。

「おい、テメエ！ さつきから、何様のつもりだ!? ガキの頃からちよつとばかり戦闘訓練を受けていたからって、何を偉そうに言ってるやがる！」

「む？ 偉そうだと感じたのなら、すまなかつたな。しかし、きみはなぜそんなに憤っているんだ？」

こう言ってはなんだが、アレクシアの口調は入学当初から変わりないのだ。

進歩がなくて申し訳ないが、クラスメートたちも、ときに偉そうに感じられるという自分の物言いにすっかり慣れたようだったのに、今さらこれほどの不興を買うとは。

そう不思議に思ったアレクシアに、ブランドンはくつと眉根を寄せる。

「同い年のやつに、上から評価されたら……っ。普通、腹が立つだろうが！」

「ふむ。そういうものなのか。わたしとしては、せっかくこうして同じクラスになれたんだ。きみたちには、可能な限り命の危険とは縁遠い人生を送ってもらいたかったんだが……。どうやら、余計なことを言ったようだ。忘れてくれるとありがたい」

若干しよんぼりしつつそう言った瞬間、慌ただしく立ち上がった者たちがいた。

入学当初から親しくしてくれている少年少女、ジョッシュとキャスリーンだ。

「いやいやいや、ちよつと待って!? そりゃあ、飛行魔導兵士育成コースに飛び込む決意なんて、まだしてねーけど！ おれは!? アレクシア！ おまえが大丈夫だって思う六人の中に入ってる!？」

「あたしも聞きたい！ だって、無理なら無理ってはじめからわかってたほうが、無駄な努力をしなくて済むじゃん!？」

アレクシアの素性を知っている彼らは、彼女の言葉をほかのクラスメートより信じてくれているのだろう。

少し考え、静かに答える。

「入っている。きみたちならば、おそらく優秀な飛行魔導兵士になれるだろう。だが、あくまでも能力的には可能というだけだ。……正直に言うなら、わたしはこのクラスの誰にも、飛行魔導兵士になどなつてほしくないと思ってる。危険な前線など、行かずに済むならそれに越したことはないんだ」

一瞬、喜色を浮かべたふたりが、ほぼ同時に眉を下げて押し黙る。

今、口にしたことは紛れもない本音だ。

ただ、少しでも可能性があるのに、自分が彼らの人生の選択を狭めるのはフェアではないとも思うから、嘘をつくこともできない。

クラスが微妙な空気になる中、アレクシアはエリックに視線を戻した。

「なあ、エリック。余計なお世話だと言われるかもしれないが、一度彼らに、わたしとウィルの訓練を見せてやることは可能か？」

「……それはもちろん、空中戦の、って意味だよな？」

ひどく複雑な表情を浮かべたエリックに、アレクシアは肯定を返す。

「武器はナイフのみ。空を戦場とする兵士が、どれほど空中での機動力を求められるのかを、実際に見てもらいたいんだ。我々の動きを見たらうで、それに対応するイメージをまるで描けないのであれば、最初から志願しないほうがいいからな」

どんな魔術も、基本となるのはイメージの構築だ。

できる者はどれほど未熟であろうと最初から可能だし、できない者はどれほど願っても叶わない。魔術における学習と実践は、イメージなくしてありえないのだ。

教育者であるエリックは、当然そんなことなど百も承知だろう。

しばしの間思い悩む顔をした彼は、やがて深く呼吸をしてから頷いた。

「わかった。このあとの俺の授業で、おまえたちの訓練をガキどもに見せてやってくれ」

「承知した」



（本当に……。アレクシアさまも、ずいぶん甘くなられたものだ）

突然、クラスメートたちの前で空中戦の模擬訓練を行うことになったウィルフレッドは、広々とした屋外訓練場に向かって合った主に問いかける。

「アレクシアさま。オレは、平均的な斥候程度の速さで動けばよろしいですか？」

「それだと、飛行魔導兵士に求められる基準には満たないだろう。——そうだな、はじめて会ったときのセフィード程度の機動力で頼む」

小声で返ってきたその答えに、思わず笑う。

「おや。あれを基準になさいますか」

セフィードは、七カ国連合が投入してきた飛行魔導兵士の中でも、間違いなくトップクラスの実力の持ち主だ。

そんな彼をクラスメートたちが目指すべき基準とするとは、アレクシアは本当にこの場で『ふるい落とし』をするつもりらしい。

もつとも、当時のセフィードは装備していた飛行補助魔導武器を破壊され、仲間たちをすべてアレクシアに地上へ叩き落とされたばかりだった。

いくら危険な魔導武器開発実験の被検体として育てられ、人間らしい感情が著しく摩耗していた彼でも、まるで動揺がなかったとは思えない。本来の彼の實力は、おそらくウィルフレッドが目にしたものよりもずっと高いはずだ。

（まあ、あのときのセフィードレベルの動きができるようになれば、飛行魔導兵士になったとして



も、そう簡単に死ぬようなことにはならないか)

納得したウィルフレッドが、かつて見たセフィドの動きを脳内でトレースしていると、アレクシアが少し離れたところで見学態勢に入っているクラスメートたちに声をかけた。

「これは、あくまでも模擬戦だ。実際の空中戦闘時は、ゴーグルとマスク、防寒着。そして、それなりに大きさのある飛行補助魔導武器を装備することになる」

薄く動きやすい訓練着を着た自分たちが手にしているのは、刃を潰したコンバットナイフのみ。空中戦を行うには、あまりにも軽い装備だ。

「それでは、開始する。——いくぞ、ウィル」

「はい」

アレクシアの号令と同時に、ウィルフレッドは一気に上空へ移動する。

とはいえ、クラスメートたちが視認できないほど高く飛んでしまつては、本末転倒だ。ほどほどの高さでアレクシアから距離を取り、一呼吸置いて反転する。

ギイン、とナイフが絡み合う金属音。

すかさず顎を狙ってきたアレクシアの蹴りを軽く躲し、きれいに一回転した彼女の腕を狙って切りつける。

(……ん?)

いつもならずかさず応戦してくるはずのアレクシアが、大袈裟に距離を取った。

——どうやら彼女は、以前対峙した七カ国連合の飛行魔導兵士の動きを模しているらしい。

そういうことであれば、とウイルフレッドはさすがに追撃をかけた。互いに余裕を持ってナイフの打ち合いを続けつつ、飛行魔術で空中を縦横無尽に飛び回る。

互いに鋭く突き出したナイフがぶつかり合い、鈍い音を立ててひび割れた。ふっと、アレクシアが息を吐く。

「このくらいにしておくか。――さすがだな、ウイル。セフィードの動きの癖まで、よく模倣したものだ」

「ありがとうございます。なかなか楽しい経験でした」

そんなことを言いながら地上を目指したふたりは、揃ってぽかんと目を丸くしているクラスメートたちの前に降り立った。

硬い表情のエリックが、声をかけてくる。

「……アレクシア。ウイルフレッド。今のが、飛行魔導兵士を目指すうえでクリアすべき、最低限の動きなのか？」

「さてな。ただ、空飛ぶ斥候を追い回していただけのわたしたちでも、この程度は動けるんだ。専門の訓練を受けた飛行魔導兵士ならば、もっと高いレベルで動けるのではないかな」

あつさりとそう答え、アレクシアはクラスメートたちを見回した。

「先ほども言ったが、わたしはきみたちが飛行魔導兵士になることを望まない。だが、きみたち自身がその道を選ぶのであれば、可能な限り相談に乗ろう。何か、質問はあるか？」

束の間、沈黙が落ちた。

ややあつて、先ほどアレクシアに嘔みついてきたブランドンが片手を挙げる。

「おまえたちは、さ。その……なんで、飛行魔導兵士つつうか……そこまで、空で戦えるようになるうって、思ったんだ？」

「なるうと思つてなつたわけではない。知つてのとおり、わたしはあまり治安のよろしくない田舎の貴族の生まれなでな。わたしが身につけている技術はすべて、領地領民を守る者の義務として学んだものだ」

彼女に続いて、ウイルフレッドも問いに答える。

「オレは、幼い頃から領地を守るために飛び回っていらしたアレクシアさまの、従者兼護衛だったのでね。主についていけないようでは、従者失格だろう？」

アレクシアもウイルフレッドも、決して自ら望んで戦う力を手に入れたわけではない。

後悔など何ひとつしていないし、アレクシアを守る自分を誇らしくさえ思っているけれど、幼い頃の自分たちを選択の自由がなかったのは事実だ。

ウイルフレッドは、その自由を持っている少年に向けてにこりとほほえむ。

「オレは、アレクシアさまを守って生きる人生を、とても幸運なものだと思つている。きみたちも自分自身が本当に守りたいものがなんなのかをきちんと考えたいうえで、飛行魔導兵士となるかどうかを決めればいいんじゃないかな」

守る、と呟いたブランドンが、ぐっと両手を握りしめる。

少しの間逡巡してから、彼は言つた。

「おれは……七カ国連合が宣戦布告してくるまでは、何かを守りたいなんて、思ったことがなかった。ただ、シンフィールドを卒業して、王宮を守る警護兵になれば、安全な場所でそれなりの給料をもらえるし、つて……それだけだったんだ」

その言葉に、クラスメートたちの多くが彼を注視した。きつと彼らも、ブランドンと同じようなことを考えていたのだろうか。

「でも……おれは今、自分で家族を守る力を、手に入れられる場所にいる。それを、幸運だと思っ  
のは……間違つて、ないよな？」

震える声での質問に、アレクシアが迷わず答える。

「間違つてはいない。ただ、きみが危険な任務に就くことを、きみを愛するご家族がどう思うかも、きちんと考えろと言っている」

小さく息を吐き、彼女は告げた。

「忘れるな。戦場では、人が死ぬんだ。先の七カ国連合の第一次侵攻で、スウィングラー辺境伯家の兵士がどれほど死んだか知っているか？ きみの家族を守りたいという気持ちは尊いものだが、それは本当に、自分の命と人生を引き換えにしても叶えたい願いのかな？」

静かな声での問いかけに、ブランドンは答えない。

彼以外のクラスメートたちもまた、沈黙を保ったままだ。

「きみたちは、幼い子どもだ。本来、守られる側の存在であるべききみたちに、このような選択を強いねばならん状況自身が間違っている。とはいえ、戦時下である現在、そんな正論をかざすこと

に意味はない。だから、これだけは言っておく」

アレクシアの声が、一段低くなる。

スウィングラー辺境伯家の兵士たちに命じるときと同じ、鋭く強い声。

「飛行魔導兵士に限らず、戦場で戦う人生を選ぶのであれば、一切の甘えを捨てる。生き残ることに全力を尽くせ。敵を殺すことをためらうな。戦場では、自分の力を過信して思い上がった者から死んでいく。そのような愚か者には、断じてなるな」

クラスメートたちが、まばたきもせずアレクシアの姿を見つめている。

ウィルフレッドは、そつと息を吐いた。

——こんなとき、自分の主が人の上に立つべき人間であることを思い知るのだ。

数百の兵士たちをも一瞬で従わせてしまふ、圧倒的なカリスマ。

それはきつと、まだ幼く柔らかな級友たちの心に、強すぎる光となって焼きついたに違いない。

(アレクシアさまは、親しくなったクラスメートの子どもたちを、飛行魔導兵士などという危険な任務に就かせたくない、と思つていらつしやるのだろうか……)

主は、気づいているのだろうか。

クラスメートたちの瞳の奥に、スウィングラー辺境伯家の兵士と同じような、熱を帯びた光が灯りはじめていることに。

強く気高く美しく、そして自分たちの未来を案じて厳しくも優しい言葉を発する少女に、彼らの心が急激に惹きつけられていることに。

「わたしからは、以上だ。——エリック、時間を取らせてすまなかったな。授業に戻ってくれ」アレクシアがエリックにそう言った瞬間、ブランドンの隣にいたディーンが、一步前に踏み出した。

「あの、さ……！ アレクシア！ おれも、聞きたい！ おれ……っ、あんまり、魔力保有量が多いほうじゃねえけど！ おれは、あんたから見て、飛行魔導兵士になれると思うか!?」

「なる。きみは体格と身体能力に恵まれているし、高い集中力も備えている。飛行魔術を習得するのも早そうだ」

勢い込んでの問いかけに、あっさりとはと返されたディーンが、一瞬間まる。

そして、胸の前に持ち上げた右手を、ぐっと握りしめた。

「そっか……うん。そっか」

——まずは、ひとり。

体格がよく、近接戦闘のセンスも高い彼は、ウィルフレッドから見ても非常に秀でた兵士となる素養に恵まれた少年だ。

これからきちんと訓練をこなしていけば、相当優れた飛行魔導兵士になるだろう。

そんな友人の姿に触発されたのか、セドリックがひよいと片手を挙げる。

「えっと……アレクシア。おれは？ がんばれば、飛行魔導兵士になれるそう?」

「ああ。きみの柔軟な発想力と咄嗟の事態への対応力は、立派なものだ。飛行補助魔導武器との相性がいいかもしれんな」

一瞬、セドリックが肩を震わせた。

伶俐な印象の持ち主でありながら、実際にはひどくのんびりとした性分の彼が、何かに驚いたり慌てたりしているところを、ウィルフレッドは今まで見たことがない。

その彼が、アレクシアに肯定されただけで、抑えきれない歓喜に瞳を揺らした。

——これで、ふたり。

彼の固定観念に縛られない自由な発想は、ときに思考が硬直しがちな兵士たちの中で、貴重な武器になり得るだろう。

お嬢さま言葉の計測と統計に全力で取り組むセドリックならば、どんな苦難にも飄々と立ち向かってくれるに違いない。

親しい友人ふたりが、揃ってアレクシアから太鼓判を押されたからだろうか。

ずっと何かを考えていたブランドンが、思い切ったように顔を上げた。

「……アレクシア。おれは？ おれも、飛行魔導兵士に、なれるか?」

「なる。きみの魔導武器を扱うセンスは相当のものだし、視野も広い。努力を怠らなければ、近衛出身のエリートにも劣らぬレベルで働けるようになるだろう」

当然のように向けられたその言葉は、ブランドンにとつてよほど驚きだったに違いない。

目を見開き口をぽかんと開いた彼は、ついで顔を真っ赤にしてわたわたと両手を動かした。

「え? えー……それ、マジで?」

「あくまでも、私見だがな。しかし、どれほど優れた素質を持つていようと、努力を怠ればただの

人だぞ。そもそもわたしは、きみたちが飛行魔導兵士となることには賛同しなかっただろう。くれぐれも、後悔する選択はしてくるなよ」

アレクシアは顔をしかめて言うけれど、おそろく彼らはもう決めている。

——ブランドンで、三人。

そして、すでにアレクシアを自身の友人だと認識している、ジョッシュとキャスリーン。彼ら五人はこれから、飛行魔導兵士となる道を選ぶだろう。

それぞれにとつての、大切な誰かを守るために。

そして、アレクシアという眩い光を追いかけて、自分の人生から失わないために。

(まったく……つくづく、人たらしでいらっしやる)

ウィルフレッド自身も覚えのある感覚だからこそ、その気持ちはよくわかった。

追い求めずには、いられないのだ。

生まれてはじめて目にした鮮烈すぎる光は、心の奥底に強く、濃く焼きつくものだから。

と、そこでエリックがアレクシアに声をかける。

「なあ、アレクシア。おまえは教室で、飛行魔導兵士育成コースを志願していいのは、六名だと聞いたな。こいつら三人と、ジョッシュ、キャスリーン。あとひとり——」

「やめておけ、エリック。おまえが今、名前を挙げた五名は、わたしに自ら聞いてきた。『自分は、飛行魔導兵士になれるか』と。それは、彼ら自身がその未来をイメージできたからだ。……おそろく、最後のひとりもイメージはできている。そのうえで、沈黙を保っているんだ」

エリックから目をそらさないまま——『最後のひとり』の生徒のほうをちらりとも見ないまま、アレクシアは言う。

「それがその生徒の選択なのであれば、我々が口を出すべき問題ではない」

「わかってるよ。……おまえたちの協力に感謝する。本当に、ありがとうな」

担任教師の謝意に頷きを返したアレクシアが、ふと何かを思い出した様子でクラスメートたちを見た。

「ああ、それから。改めて言うておくが、飛行魔導兵士に適性がある者のほうが、そうではない者よりも兵士として優れているというわけでは、断じてない。——考えてもみる。もしきみたちが部隊を率いる指揮官だったとして、だ。この五名が部下だったなら、どう思う？」

そのとき、件の五名以外の生徒たちの間に「ええと……なんか、ヤダ」という空気が広がったのは、決してウィルフレッドの気のせいではないだろう。

何しろメンバーは、脳天気——もとい、朗らかという言葉を体現したような性格のジョッシュに、すでに誤解は解けているとはいえ、入学早々男子生徒全員に喧嘩を売るような発言をした、こうと決めたら一直線のキャスリーン。

それに、クラスメートからはもちろん、教師たちからも親しみを込めて『三バカ』呼ばわりされている三人だ。

揃いも揃って、個性的にもほどがある。

アレクシアは、重々しく先を続けた。

「彼らの、不測の事態であってもすぐに行動に移せるという長所は、見方を変えれば勝手な自己判断で動くという短所にもなり得る。たとえば、彼らは仲間が危機に陥った場合には、上官の命令を無視してでも救おうとするだろう。その結果、部隊全体を危険に晒すとしてもだ」

そう言われたジョッシュたちは口を開きかけたものの、結局揃って黙り込む。きつと、彼女の言いつ分をまったく否定できなかったのだろう。

スウィングラー辺境伯家で兵を率いていた日々を思い出しているのか、ものすごくいやそうな顔をしてアレクシアは言う。

「少なくともわたしは、彼らのように扱いの面倒な部下をまとめる立場にはなりたくない。飛行魔導兵士を指さない者たちは、くれぐれも上官の命令や規則を無視することのない、立派な兵士になってくれたまえ。そうなってくれたなら、この国の一国民として、わたしも非常に心強く思う」

最後ににこりと笑った彼女に、五名以外のクラスメートが大きく頷く。

一方、おそらくこれから飛行魔導兵士を目指すだろう者たちは、ひどく複雑な表情で顔を見合わせていた。

(……うん。アレクシアさまに対する憧憬と、ご本人に『部下にはしたくない』と明言されたガツカリ感。そもそも飛行魔導兵士を目指したところでアレクシアさまの部下になれるわけじゃないのに、自分は何をガツカリしてるんだ、という困惑が、いい感じにミックスされているな)

なんにせよ、これからジョッシュたちが飛行魔導兵士育成コースに挑戦したとしても、実際に実戦投入できるレベルに育つまで数年は必要だろう。

彼らにはぜひとも、後悔しない人生を選んでもらいたいものだ、とウィルフレッドは思った。

それからいつもどおりの授業に戻ったものの、クラスメートたちはずいぶんと落ち着かない様子に見えた。

浮き足立っている、とでも言おうか。そんな彼らに、エリックの厳しく指導する声が飛んでいる。少し、うるさい。

訓練場の隅で、基礎体力向上のための地道な訓練に取り組みつつ、ウィルフレッドはアレクシアに声をかけた。

「アレクシアさま。先ほどミスター・タウンゼントが言っていた、『六人目』の件ですが。オレが想定している生徒であれば、あの場で自らアレクシアさまに確認をするのは、少々難しかったのではないのでしょうか？」

その問いかけに、アレクシアが苦笑を浮かべて頷く。

「そうだろうな。適性があることと、本人の性格がそれに向いているかは、また別の話だ。……不思議なものだな。あれほどおとなしい子どもが、おそらくこの学園で最も高い飛行魔導兵士の適性を持っているとは」

だが、と彼女はクラスメートたちのほうを眺めた。

「これでいいのだと思う。わたしはあの子のような子どもが、前線で戦う姿など見たくない」

「ええ。オレもです」

本当はアレクシアにこそ、危険な前線で戦ってほしくなどないのだけれど。

彼女自身の誇りが、安全な場所ただ座して待つことを許してくれないのだから、仕方がない。ウイルフレッドにできるのは、そんな主が決して傷つくことがないよう、ともに戦い、守る事だけだ。

——そして、その日の昼食時のこと。

いつもどおり、ジョッシュとキャスリーンとともにテーブルを囲んだウイルフレッドとアレクシアは、ふたりからの質問攻めに遭っていた。

「なあなあ！ あんなふうに空を飛び回って、目が回ったりしねーの？　なんか、特別な訓練とかやってんのか!？」

「ふたりがすつごく強いのは、頭ではわかってるつもりだったんだけどさ！　なんかもう、実際に見ると全然迫力が違うよね！　どうやってたら、あんなふう在空中でひゅんひゅん動けるの!？」

本日のランチプレートは、豚肉の香草焼きと白身魚のムニエルの二種類から選べる。

白身魚を選んだアレクシアが、ふんわりとした丸パンをちぎりながら、ふたりの質問に一言で答えた。

「慣れだ」

「……………へ?」

「……………え、それだけ?」

拍子抜けしたような彼らに、アレクシアは真顔で頷く。

「うむ。強いて言うなら、任務中に敵の攻撃を食らって、何度か死にそうになったことがある。あのとき抱いた危機感が、一気に全身の感覚を開いてくれた気はするが……。まあ、当然ながらそんな体験はおすすめでできないな」

ジョッシュとキャスリーンが、ものすごくしょっぱい顔になる。

「なるほど。つまり、死にたくなければコツコツ地道な訓練を続けるしかないってことだな」

「そうだよね……。そんな都合のいい抜け道なんて、あるわけないよね」

理解が早くて、結構なことだ。

そんなふたりに、アレクシアが問う。

「そもそもきみたちは、わたしの話を聞いていたのか？　いくら素質があつたとしても、わたしはふたりが飛行魔導兵士になることには、反対だ。きちんとした教育を受ければ、きみたちならば間違いなく立派な王宮警護兵になれる。わざわざ危険な前線勤務を志願することもあるまい」

ウイルフレッドとアレクシアから見て『飛行魔導兵士になれば、間違いなく早死にする』という生徒たちは、もはやその道を志願することはないだろう。

適性がある六名についてだって、本音のところでは、アレクシアは最初からその道を否定したかったに違いない。

けれど、ジョッシュたちの可能性を他人である彼女が潰してしまうのは、あまりに身勝手に傲慢だ。

だからこそ、アレクシアなりにできるだけ誠実な対応をしたのだろうが、飛行魔導兵士を目指す

ことには賛同も応援もするつもりはない、ということか。

眉根を寄せた彼女に、ふたりは顔を見合わせてから笑って応じた。

「わかつてる。ちゃんと、考えるよ」

「うん。……ただね、アレクシア。あたしは、あんたのことを大事な友達だと思ってる」

虚を突かれた顔をしたアレクシアが、まじまじとキャスリーンを見つめる。

だからさ、とキャスリーンが笑みを深めた。

「あたしは、アレクシアに庇かばわれるばかりじゃなくて、アレクシアに頼ってもらえる大人になりたい。知ってる？ 一方的に心配されたり、守られたりするのってね。結構、悔なげしかったりするんだよ」

そうそう、とジョッシュが頷く。

「おまえがおれたたちの心配をする気持ちは、わからなくもないけどさあ。なんつっても、今のおまえとおれたちじゃあ、ガチで勝負したら瞬殺しゅんざつ間違いなしだし？」

ひよいと肩をすくめて、彼は言う。

「でもな、アレクシア。おれたちだって、いつまでも弱いばかりのガキじゃない。ついでに言うなら、おれたたちの選択におまえが責任を感じる必要なんて、全然ないんだ」

「……そうか」

アレクシアが、ふっと息を吐く。

「すまない。わたしはどうやら、きみたちの気持ちをまるでわかっていなかったようだ」

「いや、おまえがおれたたちのことを考えていろいろ言ってくれてたのはわかるから、それは全然いいんだけど。……ただまあ、おれたちだって、やるときややるよってことで」

少し照れくさそうな顔をしたジョッシュが、アレクシアとウィルフレッドを順に見る。

「おまえたちが、おれたちよりずっと先にいるのはわかつてる。だから、おまえたちはそこで待てるよ。そのうち、絶対追いついてやるからさ」

「そうか。それは、我々もうかうかしていられんな。これからは、よりいっそう鍛錬たんれんに励はげむことにしよう」

真顔で応じたアレクシアに、目を丸くしたジョッシュがぎゃあと喚わめいた。

「いや、だから！ 待ってるって言っただじゃん!？」

「そうだよ！ ただでさえ、目標までの道のりが長すぎて気が遠くなりそうなのに！ 距離をまます広げようとしなくてくれる!？」

ふたりの切実な訴えを、アレクシアがあっさり切り捨てて。

「何を言う。きみたちは、わたしにとつても大切な友人なんだ。万が一、きみたちの身に何かあった場合には、即座にこの手で敵を殲滅せんめつせねばならんだからな。日々の鍛錬を怠るわけがないだろう?？」

ジョッシュとキャスリーンが、固まった。

そんなふたりに、ウィルフレッドは笑って告げる。

「一応言っておくけれど、もしそうなった場合には、オレはアレクシアさまを止めるつもりはない

よ。ああ、ヒューバートどのにはちゃんと連絡してあげるから、安心するといい」  
兄の名前を出された途端、蒼白そうはくになったジョッシュが叫んだ。

「安心できるかー！ ちよ、おまえ、火に油を注ぐような真似とか、マジでやめてくれる!?」

「……あのさあ、ジョッシュ。もしあんたが、本当に飛行魔導兵士育成コースに志願するとしたらだよ？ その前に、ヒューバートさんにきちんと報告しておかないと、絶対、ものすごくマズいことになるんじゃない？」

キャスリーンの指摘に、あ、と声を零したジョッシュが、再び固まる。

そんな彼に、アレクシアが言う。

「うむ。ヒューバートどのがきみの飛行魔導兵士育成コース志願を認めるのであれば、わたしからは何も言うまい」

ウイルフレッドも黙って頷ぎ、同意を示す。

何しろ、ジョッシュに対してかなり強めのプラコンを發揮しているヒューバートは、若くして王立魔導武器研究開発局で働く天才研究者。

この国の飛行魔導兵士部隊が採用している飛行補助魔導武器の、開発チーム責任者なのだ。

もしジョッシュが飛行魔導兵士になるという意思を貫き通すのであれば、きっとヒューバートは弟のため、飛行補助魔導武器の安全性を天元突破の勢いで高めるに違いない。

ウイルフレッドは、呆然ぼうぜんとしているジョッシュをしみじみと眺める。

(……うん。ヒューバートどのがいる限り、ジョッシュだけはどんな危険な任務にぶち込まれよう

と、絶対無事に帰ってくるような気がする)

そのときウイルフレッドは、自分があのかんりの変人である天才研究者を、思いのほか信頼していることに気がつき、なんとも言いがたい気分になった。

ヒューバートは、たしかに比類無き頭脳を誇る天才研究者であるし、人柄も決して悪いものではない。むしろ、かなりの好青年であると言えるだろう。

しかし天才というのは、ときに越えてはいけなない一線を、鼻歌交じりのスキップで軽やかに踏み越えていくものなのである。

アレクシアと自身の安全を確保するため、今後もヒューバートと接触する際には慎重に慎重を期すことにしておこう、と心に決めるウイルフレッドだった。

## 第二章 家族

新学期がはじまって、最初の休息日を明日に控えた夕刻のこと。

王都における拠点としている、母親のブリュンヒルデから譲り受けた屋敷に戻ったアレクシアは――。

「お帰りなさいませ、アレクシアさま」

「……おまえは、誰だ？　うちの連中に、何をした？」

玄関ホールを開けた途端、ウィルフレッドともども困惑してしまった。

なぜなら、ごくありふれた平民階級の中年女性にしか見えない人物の周囲に、スウィングラー辺境伯家の本邸から連れてきた執事にメイド頭、そして従僕たちが、揃って汗だくになって転がっていたからだ。

顎先から汗を滴らせながらもどうにか立っているのは、元は辺境伯家の諜報部の若手エースだったという青年、レオだけだ。

レオが、ぜいぜいと肩で息をしながらアレクシアを見る。

「あ……。お帰りなさいませ、アレクシアさま。……こちら、ブリュンヒルデさまのご紹介でした、ヒラリー・アボット夫人、です」

「ブリュンヒルデさまの？」

アレクシアは、驚いた。

この夏、彼女は北の隣国、エッカルト王国の王妹である母親のブリュンヒルデと、はじめて言葉を交わす機会を得た。

再婚相手であるエッカルトの英雄とともにこの国を訪れていたブリュンヒルデは、先日妊娠が判明して祖国に帰ったばかり。

その際、アレクシアのために優秀な部下を派遣すると言っていたように思う。

しかし、別れの挨拶をしてから、まだ十日も経っていないのだ。

件の部下がこれほど早くやってくるとは、さすがに想定外である。

困惑しつつ見知らぬ女性に目を向けると、彼女はコロコロと楽しげに笑った。

「はい。どうぞ、ヒラリーと呼んでくださいな。アレクシアさまは、こちらの玄関ホールを屋内訓練施設としてお使いになっているということでしたので、さっそく私も参加させていただきました」

おっとりとした穏やかに語ったヒラリーが、軽く頬に手をあてて床に転がっている者たちを見回す。

「みなさま、お若いのにずいぶん腕が立ちますのねえ。本当に、驚きました。特にそちらの……レオさん、でよろしかったかしら？　彼など、こうして最後まで立っていらして。アレクシアさまのおそばに、これほど若手の腕利きが揃っていることをお知らせしたら、我が主もきつとご安心くださいますわ」

部下たちの状態をざっと目で確認したアレクシアは、ヒラリーに問うた。

「……失礼、ヒラリーどの。ひょっとしてあなたは、こちらに到着そうそう、屋敷の者たちをご指導くださったのだろうか？」

まあ、とヒラリーが楽しげにほほえむ。

「指導だなんて、滅相もございませぬわ。ただ、少しばかり……ねえ？ 我が主の大切な息女であるアレクシアさまに、どれほどの力量を持つ方々がお仕えしていらっしゃるのか、気になってしまっただけですのよ」

まるで他愛ない世間話のようにそう言って、スカートの裾を軽く摘んだ彼女はアレクシアに一礼した。

「それでは、アレクシアさま。こうしてご挨拶もさせていただいたことですし、私はこれからブラジエナ王国に行つてまいります」

瞬間、ウィルフレッドのまとう空気がひりついた。

屋敷の者たちに、彼の素性はいまだ共有していない。

困惑した様子のレオたちをちらりと見たヒラリーは、アレクシアに視線を戻すと、どこまでもにこやかに続けた。

「夫と子どもたちは、すでにあちらへ向かっておりますの。今年の夏は、いろいろと忙しかったのですから……。ようやく、夫婦揃つてまとまった休みを取ることができました」

ブラジエナ王国は、さまざまな名所を抱える観光立国として有名だ。

季節を問わず、大陸中から数多くの観光客が訪れる。

だが今、ランヒルド王国の南東方面の国境はどこも緊張状態にあるため、東方にあるブラジエナ王国へ赴くとなると、かなり面倒なルートを選ばなければならない。

そんな懸念を微塵も感じさせないヒラリーの様子を見るに、彼女とその『家族』はきつとそういった潜入任務にも長けているのだろう。

——ブリュンヒルデが、自身の誇る優秀な部下であるヒラリーたちに、ブラジエナ行きを命じた。それはきつと、彼女がその必要があると判断したからだ。ならば、こちらから言うべきことは何もない。

もともと、七カ国連合からの宣戦布告がなければ、いずれウィルフレッドとともにブラジエナ王国を訪れてみようと思っていたのだ。ブリュンヒルデの信頼する部下が、自分たちの代わりに赴いてくれるのであれば、願ってもない話である。

なるほど、とアレクシアは頷いた。

「あちらは、この国よりもかなり暑さが厳しいと聞いている。夏の盛りを避けられて、かえつてよかつたのではないか？」

「ええ、本当に。それでは、アレクシアさま。失礼いたします」

さらりと辞去の挨拶をしたヒラリーは、玄関先に置いてあった小さな旅行鞆を手に取ると、そのままのんびりとした足取りで出ていった。

その背中を見送つたアレクシアは、ぼそりと呟く。

「本当に、どこからどう見ても、一般的な平民のご婦人とか思えんな……。ブリュンヒルデさまがおっしゃっていたとおり、とんでもなく優秀な御仁ごじんのようだ」

誰に向けたわけでもない言葉に、真つ先に反応したのは、それまで床にへたり込んでいた執事のクライドだ。

「……アレクシアさま。ご帰宅早々、このような醜態しゅうたいを晒して誠に申し訳ございません。ですが——」

滅多めったなことでは動揺しないはずの執事が、まるで恐ろしいものを見たかのような目を、ヒラリーが去っていった方向に向ける。

「あの、アボット夫人という方は……。忌憚きたんのない言い方をしてよろしければ、得体の知れない化け物です」

「ほほう？」

クライドは、もともとスウィングラー辺境伯家の本邸ほんていで優秀な執事補として働いていた青年だ。それなりの戦闘訓練は受けているし、新兵の若者程度であればまず問題なく制圧できる。

そんな彼の口から『化け物』などという言葉が出てくるとは、ヒラリーはいつたい彼らに何をしたのだろうか。

好奇心を刺激されたアレクシアに、袖そでで乱暴に額ひたいの汗を拭ぬぐったレオが言う。

「いや、本当に意味がわからなかったですよ。あんなごく普通のご婦人のようなお姿で、にこにこ笑って立っているだけのように見えたのに、どれだけ俺たちが向かっていてもいつの間にか床に

転がされているんです」

「ふむ。さすがは、ブリュンヒルデさまご自慢の部下といったところか。あと少し早く戻ってこれなかったのは、非常に残念ではあるが……。まあ、いずれまたご挨拶することもあるだろう」

平民のご婦人の姿をした嵐あらしは、アレクシアの元には留まらない。

ヒラリーが主と定めた相手は、あくまでもブリュンヒルデだ。いつか必ず、彼女は敬愛する主の元へ帰っていく。

まだまだ未熟な今のアレクシアにできるのは、経験豊かな大人たちの厚意に、素直に甘えておくことだけだ。

さつさと意識を切り替えたアレクシアは、ウィルフレッドを見上げた。

「ウィル。おまえは、おまえにできることをすればいい。今日は、セフィードとベネディクトもこちらに来るのだから。わたしがベネディクトの魔力制御訓練をしている間、おまえはセフィードの様子をよく見ておいてくれ」

何しろこの数日、セフィードはこれまでまるで無縁だった『貴族のお坊ちゃまとその従者たち』がひしめく聖ゴルトベルガー学園に、閉じ込められていたようなものなのだ。

いくら彼が凶太い性格をしていても、慣れぬ環境にまるでストレスを感じないということはありえない。

ひとつ深呼吸をしたウィルフレッドが、いつもどおりの穏やかな声で応じる。

「了解いたしました、アレクシアさま。それでは、セフィードの魔導剣マジックソード使用許可をいただけます

か？」

「ああ、構わんぞ」

セフィードのために特注した魔導剣はまだ納品されていないけれど、訓練用のものであれば、それこそブリュンヒルデが屋敷に置いていくれたものが山ほどある。

……ストレス解消のために危険な武器を振り回すのは、青少年の健全な育成という点において、正直どうかと思う。

しかし、セフィード本人が現在もつとも興味を持っているのが、ウィルフレッドの剣技なのだ。細かいことにはひとまず目を瞑っておくことにして、アレクシアはまだ床にへたりこんだままのメイド頭を助け起こした。

クライドの妻でもある彼女——キャロルは、ヒラリーにいいように転がされ続けたのが、よほど悔しかったのだろうか。

アレクシアに礼を言っただけで立ち上がったあと、据わった目つきで「打倒、アボット夫人です……！」とぶつぶつ呟いていたのが、ちよつと怖かった。

セフィードを伴ったベネディクトが屋敷にやってきたのは、それからすぐのことだ。

休息日が終わるまでの外出許可は、無事に取ることができたらしい。

手土産の可愛らしいクッキー缶を携えたベネディクトは、以前よりもずいぶん顔色がよくなったようだ。

表情も見違えるほど柔らかくなって、実に可愛らしい。

「こんにちは、姉上。今日はお招きありがとうございました」

「ああ。元氣そうで何よりだ。セフィードは、きみの従者兼護衛としてうまくやれているかな？」  
相変わらず無表情な銀髪の少年を見ながらの問いかけに、ベネディクトが笑って答える。

「はい、もちろんです。ぼくがスウィングラー辺境伯家の次期当主に就任したことで、以前よりも話しかけてくる方が増えたのですが……。セフィードさんが、ぼくが疲れてしまう前にその場から連れ出してくれるので、本当に助かっています」

アレクシアは、ぱつとセフィードを見た。

頭を全力で撫で回してやりたくなつたが、どうにか堪えて笑いかける。

「素晴らしいぞ、セフィード。実に立派な従者ぶりじゃないか。本当に、よくがんばっているな。何か、食べたいものはあるか？ おまえの好きなチョコレートとレアチーズのタルトは用意しているが、ほかにも欲しいものがあればなんでも言うといい」

宝石のようなアイスブルーの瞳に、戸惑いが滲む。

「おれは、与えられた任務をこなしたただけだ。褒められる理由がわからない」

そうか、とアレクシアは頷く。

「ならば、覚えておいてくれ。わたしは、おまえがベネディクトの護衛を立派にこなしていることが、とても嬉しい。それ以上に、おまえがひとりの人間として驚くほど成長してくれていることを、心から喜ばしく思っているんだ。このまま『礼儀正しく可愛い普通の子ども』から『強く優しい大

人』へ続く道を、しっかりと歩いていくんだぞ」

セフィードがアレクシアの庇護下にある子どもでもある以上、いいことをしたら褒めるのは保護者の義務だ。

もちろん、悪いことをした際には叱り飛ばす義務もあるわけだが、今のところセフィードは大変いい子でいてくれている。育て甲斐のある子どもで、嬉しいばかりだ。

少しの間沈思したあと、かつて敵国の飛行魔導兵士だった少年は頷いた。

「了解した。ただ、チョコレートとレアチーズのタルトがあるなら、それだけで充分だ。おれは、肥満体にはなりたくない」

アレクシアは、感動した。

思わずウィルフレッドを見上げ、ぐっと両手の拳を握りしめる。

「聞いたか、ウィル！ セフィードが、素晴らしく成長しているぞ！」

たった一度説明したきりだというのに、素敵な甘味とカロリーの関係をしっかりと理解し、自らの健康管理のため自主的に制限できるとは、セフィードはなんと立派なのだろう。

ウィルフレッドが、にこやかに頷く。可愛い。

「そのとおりですね。オレも、とても嬉しく思います。——セフィード。先ほど、おまえの魔導剣使用許可をいただいたんだ。少し、オレと手合わせをしてみないか？」

「するー！」

即座に応じたセフィードの瞳が、嬉しそうに輝いた。

彼らの可愛らしさに、アレクシアは危うくその場に座り込みそうになる。

(わたしの！ 育てた子どもたちが！ こんなに可愛いーっ!!)

世界中にふたりの可愛らしさを自慢したいくらいだが、残念ながらウィルフレッドはブラジエナ王家に滅ぼされた公爵家から、密かにこの国に逃がされてきた末っ子次男。

そしてセフィードは、敵国が実戦投入してきた飛行魔導兵士部隊の唯一の生き残りにして、彼らが侵略の大義として掲げているウルマス教のトップである、現教皇の実子なのである。

特に、セフィードの生存が明らかになれば、彼を危険な実験の被検体とした連中が、その身柄を奪いにやってくるかもしれない。

だからこそアレクシアは、こうして拠点となる屋敷を手に入れたにもかかわらず、より安全な聖ゴルトベルガー学園に彼を預けているのだ。

(この屋敷の警備システムも、充分立派なものを構築してはあるんだが。さすがに、王太子の通う学園のそれには、敵わんだろうからな……)

何より、この屋敷は十五歳の子どもに社会性を身につけさせる場としては、小さすぎる。

多少のストレスになろうとも、同年代の子どもが大勢集う学園にセフィードを預けることには、きつと大きな意味があると思いたい。

それからウィルフレッドとセフィードが中庭に出るのを見送ったアレクシアは、夕食の時間になるまでベネディクトの魔力制御訓練に勤しむことにした。

本来ならば、幼児期からはじめるべきそれを、十五歳の今になってはじめるのだ。

相当の苦勞を覚悟していたアレクシアだったが、その予想はあっさりと覆くぶされることになる。

「……驚いたな。きみの魔力を扱うセンスの高さは、おそろく天性のものだ。実に素晴らしい」

「ええと……あ、ありがとうございます？」

ベネディクトが困惑したように、そして少し気恥きぢずかしそうに応える。

彼は、幼い頃からろくな食事も与えられず、運動もさせてもらえないという虐待ぎやくたいを受けていた。

そんな彼が、自身に勝るとも劣らないほどの魔力を持っていると知ったとき、アレクシアはよくもまあ今まで魔力暴走を起こさなかったものだと感嘆した。

幼い子どもの魔力は、制御しきれない感情のままに暴走してしまうことが珍めづしくない。だからこそ、強い魔力を持って生まれた子どもの養育には、慎重に慎重を期さなければならぬのだ。

——それなのに、幼いベネディクトの周囲にいた大人たちは、誰ひとりとして彼を正しく導こうとしなかった。

ほんの少し何かが違っていたら、とんでもない惨事ざんじが起こっていても不思議はない。

アレクシアは今まで、そんな不幸が起こらなかつたのは、ベネディクトが非常に優しりぞしくて思慮しりょ深い少年だったからだと思っていた。

他者を傷つけることを絶対の禁忌きんぎだと考えているからこそ、彼は本能的に自らの力の解放を許さなかつたのだ、と。

だが今、改めて思う。

ベネディクトは、本当に優しく賢い少年だ。

けれど、それだけではない。

彼が持つて生まれた、魔力の扱いに関する卓越たくやくしたセンスもまた、幼かつたベネディクトを自身の魔力暴走から守ってきたのだ。

アレクシアは、しみじみと息を吐いた。

「きみは本当に、外見以外はまったくエイドリアンさまに似ていないのだな……」

「……ええと、姉上。それは、褒め言葉として受け取っていいのでしょうか？」

首を傾げたベネディクトに、もちろんだ、と頷く。

「わたしたちの父親は、本当に外見しか褒められるところのない人間だつたからな。西の別邸に入つてからは、すっかり意気消沈しているらしいぞ」

エイドリアン——アレクシアとベネディクトの実父は、現在後妻に迎えたばかりのダフニーと、その娘であるダイアナとともに、スウィングラー辺境伯家の別邸に軟禁なんきんされている。

対外的には、エイドリアンが病を得たことによる、家族揃つての療養りょうようだ。

しかし、その実態は無能な中継ぎ後継者と、ベネディクトを虐待していたダフニーとダイアナの、スウィングラー辺境伯家からの排除である。

そうですか、とベネディクトが長い睫毛まつげを伏せた。

「ぼくは結局、エイドリアンさまには一度もご挨拶できませんでしたが……。なぜでしょうね。まったくさびしいとは思わないんです」

「わたしとて、あの方と挨拶したのは夏季休暇に絶縁宣言をもぎ取ったときの一度だけだぞ。あ

の方が大勢の女性を侍らせているところなら、遠目から何度もお見かけしたがな」  
ベネディクトが、ぼつと顔を上げる。

「そうだったのですか？ 姉上はともエイドリアンさまを敬遠していらっしやいましたから、それなりの交流があったのかと思っていました」

「うむ。普通ならば、よく知りもしない相手を軽蔑するなどあつてはならないし、愚の骨頂だとも思うんだが……」

はあ、とアレクシアはため息をついた。

「あの方のなさりようは、少々派手すぎた。子ども同士の交流の場でさえ、わたしはあの方の奔放な振る舞いについて、周囲から同情されるほどだったのだぞ」

「それは……本当に、お気の毒でしたね」

憐憫の眼差しが、胸に染みる。

とはいえ、ろくでなしの父親の話題など、いつまでも続けたいものでもない。

改めて、ベネディクトに向き直る。

「まあ、昔のことだ。——今日の訓練はここまでにしておこう。それから、きみの魔力制御訓練か  
思いのほか順調に進みそうですね。できれば並行して、少しずつ基礎体力をつける訓練もはじめ  
ていきたいと思うのだが、問題ないか？」

「はい、大丈夫です。その……ぼくも、できるだけ早く体力をつけたいと思っていますので。そちら  
の訓練をはじめただけなのは、とても嬉しいですよ」

はにかんで言う彼がとても可愛くて、アレクシアはほっこりした。

「やる気があるのは、いいことだ。とはいえ、無理だけは絶対しないように。焦って体調を崩して  
しまつては、元も子もないのでな」

なんといつても、ベネディクトの体力増強訓練のマニュアルを作ったのは、祖父のデズモンドな  
のだ。

小児科医に相談しながら完成させたというそれは、ちよつとした書籍くらいの厚みがあつて、  
はじめて見たときには驚いた。

あれだけ細かく指示を出されておきながら、アレクシアの監督下でベネディクトの体調を崩させ  
るようなことがあつては、何を言われるかわからない。

（おじいさまも、ベネディクトの体の細さには危機感を覚えていらしたしな。できることなら、ご  
自身で直接面倒を見てやりたい、と思われているのかもしれないが……）

さすがに、現在七カ国連合の侵攻を最前線で食い止めているスウィングラー辺境伯家の当主が、  
孫の養育のために領地を空けるわけにはいかないだろう。

可愛いベネディクトの相手はアレクシアに任せて、せいぜいむさ苦しい兵士たちの相手をしてい  
るがよろしい。

アレクシアは、今の温和になったデズモンドのことを祖父として心から敬愛しているが、だから  
といって幼少期に厳しすぎる鍛錬を課された恨みは、決して忘れていないのである。